悼

去る6月25日渡邊雄一さん逝去されました。謹しんでご冥福お祈りします。宮本さん津川さんから追悼文寄せられました

渡邊雄一さんを悼む

宮本　誠（S48文卒）

6月25日渡邊先生がご逝去されました。私が先生とお呼びするのは、渡邊さんが教職に就かれていた以上に常に尊敬する存在であったからです。

先生との出会いは、守谷稲門会が創成期のころ、先生のお宅で「寺子屋」や「歴史散歩」という稲門会活動の企画を練った頃からです。

先生は長い間闘病を続けられ、虎の門病院に2度入院されました。2度目の入院中に、奥様も病で倒れました。ご長男は仕事上留守が多く、退院後は体調がすぐれないにも拘わらず、ほとんどお一人での生活を余儀なくされました。宮島和延さんと一緒によく先生のお宅にお邪魔をして雑談をしていましたが、決して弱音を吐かず、いつも快活に振る舞っておられました。しかし、病気の進行とともに亡くなる前の数カ月は目立って日常生活に支障をきたすようになりました。

高齢社会の到来によって、福祉政策が叫ばれています。「遠くの親戚よりも近くの他人」といいますが、先生がお亡くなりになる前の状況を見て、地域社会や友人・知人とのつながりが希薄になってはいないか、福祉政策という言葉の中に、私たち一人ひとりが利他の心を忘れ、行政任せにしているのではないか、そう感じざるを得ませんでした。

先生はこの4年間、江戸時代に守谷を訪れた文人墨客の歌碑の建立に力を注いでおられました。その碑は8月10日にお披露目されました。この日を待たずして旅立たれました。生と死が重なるという避けがたい運命に直面し、最期の瞬間まで生を意味深いものとした先生の意志には平々凡々と生きている私に人間の尊厳を教えてくれました。歌碑には建立に携わった方々と共に、代表者としての先生の名が刻まれています。この碑はこれから守谷の地に生まれ育つ人々に何百年も永く郷土愛を育むことになろうと思います。

私の携帯電話には先生の番号が登録されていますが、消去する気持ちにはなれません。電話をすると、「ワタナベでーす」という先生の元気な声が聞こえてくるようです。

先生ご夫妻は大変仲睦ましく、いつもお二人ご一緒でした。私が畑で作業をしているとお二人で散歩に来られ、夏の暑い日には冷たい飲み物の差入れをして頂きました。あのおいしさは忘れられません。この世でご縁をいただき私も大変幸せな時間を過ごさせていただきました。先生、安らかに眠って下さい。そして、私がそちらに行ったらまたいろいろとお話しさせて下さい。

合掌

渡邊雄一さんの一言

津川　裕行（S55法卒）

「つも津川さんが誘ってくださっているのだから早慶戦行きませんか。」渡邊さんの定例会でのご発言がきっかけで2018年6月3日の早慶戦観戦が実現しました。試合は9対0での早稲田の快勝だったのですが、試合が終わりまわりの人たちが席を立って帰り始めた時の渡邊さんの一言が今でも忘れられません。「校歌を歌ってエール交歓をやってから帰りましょう。」早稲田の校歌は手を高く上げて歌い、慶應の塾歌の時は直立してじっと聞いておられました。「い企画をしてくれてありがとう」と喜んでおられ、私も嬉しくなったことを思い出します。宮島さんのお話では秋のオール早慶戦にはぜひ行きたい、とお話しになっていたとのこと。今回は実現できず残念です。

合掌

在りし日の渡邊さんと早慶戦野球観戦

イベント

渡邊雄一さんらが中心となり守谷将門誌歌碑建立に心血を注がれました。残念ながらその碑の完成を観ぬまま渡邊さんは旅立たれました。塚原さんにその様子を寄せていただきました。

塚原　三千勝（S33教卒）

春が来て桜の季節になると西林寺（さいりんじ）のしだれ桜を愛でによく足を運んだものである。

境内の一角に

「行く年や空のなごりを守谷まで」

一茶の句碑がある。

平将門（桓武天皇五代の末裔）は天慶の乱を起こし、自ら親皇と称して守谷の平台山（ひらでやま）に城を築き天下（今の関東一円）を治めた。

江戸時代に将門ブームが到来し多くの文人達が守谷を訪れ斉藤家等々で親交を深めた。それらの文人達の作品（句）を残そうと記念碑を建立し、令和4年8月10日にそのお披露の会を持った。

最後に私も一句

「将門の栄華をしのぶ平台山（ひらでやま）」